

# 選擇集解説

小西存祐

## 一、はしがき

私は學校で、曾て勅修御傳の講義をしたことがあります。とうとう四十三の卷は嵯峨の正信房の傳記になつて、同御房がつねに申されたといふ學問選擇集にはすぐべからずといふ一節へきました。

私はこゝで、選擇集の宗門にとつて大切な寶典である所以を充分力説する必要があると思ひ、大略そのことを申しました。すると突如ひとりの學生が立あがつて、私につきの様な質問をし始めました。

先生！選擇集は仰せの通り、宗祖の立教開宗の著作として頗る重要な典籍であるといふことは、私も前から聞いてゐます。従つてそれが宗典として、謂はゆる宗門第一の書であると云ふ所以も、大體了解しました。けれども實際その内容を窺つてみるに、あんな漢文の而かもたゞ經釋の文を斷片的に羅列されたものが、どこにそんな重要さを持つてゐるので有りませう！どうも私にはどこにもそんな重要さが在る様には思はれません。果して選擇集には、さうした實際の價値が在るのでありませうか

私はこの意外な質問に、實は驚いたのであります。驚いたと云ふ所以は、その學生の選擇集てふものに對する了解が、あまりに淺薄であつたので、それがむしろ私には意外なことに感じられたからであります。

けれども私は、その學生の率直な眞面目な態度に頗る敬意を表しました。そしてそれを大に賞讃しました。なせなれば、學生のこの質問は、畢竟自分が選擇集に對して無知であると云ふことを、自ら告白してゐるに過ぎません。而かも其れを大勢の中で堂々と憚らず質さんとする其の率直さ、その眞面目さこそ、聽て選擇集の眞の了解に至る第一歩であると私は思つたからであります。

夫れゆへ私は、その學生に對し、大畧つぎの様な説明を與へ、且つ最後に、明禪法印の述懷鈔の文を擧げて、一同を諭しました。其文に云ふ

近來法然上人淨土宗を興し、專念の行をすゝめしかども、大にそねみ、大にそしりて、學するにをよばずして、むなしくすぎぬ。しかるに不慮のほかに、かの上人の門弟に向顔することありき。彼人のいはく、きかざるには、信も謗もともにあやまりあり、先師所造の書あり、これを見て、もしは信じもしは謗すべしとて、選擇集をくれり。これを見るに、一遍は、なにともおもひわくかたなく見をばりぬ、二遍には、偏執のどがやまねくらんとおもひて見をわりぬ。第三遍よりは、深旨ありとみなして、四五遍これを見るに、信をまして疑なし。我朝に淨土をすゝめ念佛をひろむる人

おほしといへども、この上人は、信謗ともにつねの人にこねたり。そのゆへをたづぬるに、一向專念のすゝめよりおこれり。つねの人の心にたがへば、そしるにいはれあり。つねの人の義にこねたれば、信するにいはれあり。この義を立せずば、あながちにそしるべからず、あながちに信すべからず。むかしもいまも、この義をたつる人なければ、失たるべくば、人にすぐれたる失たるべし、徳たるべくば、人にすぐれたる徳たるべし。ゆめ／＼普通の義に准すべからず(勅傳四十一卷)と。

こ、に一遍は、何心なく通讀をしてしまひ、二遍目には、少しく獨斷の嫌が有ると見、三遍目には何物か底に潜んでゐると云ふ様に考へ、四遍五遍くりかへして、遂に其心を攪んだとあります。これは獨り學生だけと云はず、お互ひにわれ／＼も、今すこし深く選擇集を讀んでみる必要が有りはせぬかと思ひます。

それで私は、已下その學生に與へた解答にもとづき、だいたい選擇集の内容を解説してみようと思ひます。もとより初學の手引草に過ぎませんので、敢て學者の参考に資するつもりではありません。

## 二、立教開宗の著作と云ふについて

最初にまづ立教開宗の著作と云ふことに就て、あります。昔から選擇集は、宗祖が立教開宗を表明された宣言的著作だといふやうに云はれてゐます。成程それに相違はないので有りまして、現に凝然の如きも源流章に、今集の述作年代を以て一宗の開立紀元と定めてゐます。

しかし宗祖が、實際最初からさうした用意のもとに、この撰述をされたかどうかは頗る疑問で、恐らくそれはさうではなかつたといふ事は、その奥書を見ても解かると思ひます。

今不<sub>レ</sub>圖蒙<sub>レ</sub>仰、辭謝無<sub>レ</sub>地。仍今愁<sub>二</sub>集<sub>一</sub>念佛要文、剩述<sub>二</sub>念佛要義<sub>一</sub>。唯願<sub>二</sub>命旨<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>願<sub>二</sub>不敏<sub>一</sub>。是即無慚無愧之甚也。

こゝに仰といひ命旨といふは、果して何人の夫れを申されたのか、明かにその名前が見へてをりませんが、ほかの傳記等から見れば、確かに是れは當時の關白、九條兼實公であつたといふことが斷定できます。

尤も兼實公が、さういふ動機よりして、さうした撰述を請はれるに至つたかと云ふことについては異説があります。徹選擇、十六門記などで見ると、兼實公は謂はゆる公私總忙の身で、即施即瘵であつた。乃で自分の癡忘に備へたいといふ考から、この撰述を謂はれたのだと申します。所が九卷傳を見ると、宗祖は前年來御病氣で、而かも餘ほど御重態であつたやうであります。尤も勅傳などでは、宗祖の此時の御病氣を、左まで御重態のやうには申してをりませんが、併し漢語燈錄を見ると、建久九年四月の日附で、沒後遺誠文といふものが一篇あります。是は云ふ迄もなく宗祖の御遺言狀で、決局この御遺言狀は、其のとき不用となつたのでありますが、とにかく宗祖が、爾うして最後の用意をされた所を見ると、此時の御病氣はよほど御重態であつたことが察せられます。さういふ譯で、兼實

公は萬一の場合を顧慮し、後の御形見にもと本集の撰述を請はれたのだと云ひます。所がまた勅傳は恰度その兩方をあはせて次の如くに云つてゐます。

淨土の法門、年來教誡を承るといへども、心腑におさめがたし。要文をしるし給はりて、且は面談になすらへ、且は後の御かたみにもそなへ侍らん(勅傳十) 一卷と。

想ふに是れは、この勅傳の説が一番正しい様に私は思ひますが、併しいづれにしても、選擇集は宗祖が兼實公の願ひに由て書かれたものといふことは確かで、立教開宗などいふことを、豫め豫想して物されたものでないといふことは、事實であらうと思ひます。

けれどもこゝに注意を要することは、謂ふ所の兼實公の念願であります。兼實公の念願は、上にも叙べた様に、一つは自分の癡忘に備へ、一つは又後の御形見にもといふ頗る深い念願から來てゐます。従つて宗祖のそれに對する應答も、たゞ一時の特種な問題に對して答へられたものとは、頗る趣を異にしてゐます。つまり宗祖は、兼實公の懇願に由つて、偶然にもそれが、御自分の信仰を其まゝに發表される機會に接しられた譯であります。この宗祖の胸の内に持つてゐられた信仰、これぞやがて宗祖の胸裡に成立つてゐた活きた淨土宗で、選擇集は畢竟その文書的發表に外ならぬ譯であります。それゆへ選擇集は一面から云へば、全く兼實公に對する傳道書であります。けれども又一面から見れば宗祖の信仰の告白書であつたと云ふことが云へます。

選擇集を立教開宗の著作だと云ふは、實にこうした意義に於て言ふので、是は吾々がまづ第一に心得て置かなければ成らぬことだと思ひます。

### 三、内容の體裁について

次に内容の體裁について、有ります。選擇集は、改めてこゝに説明をするまでもなく、その内容が、十六章みな何れも經釋の要文を引用してあります。勿論その間には「私釋」があり「總結の文」があつて、謂はゆる念佛の要義が述してはありますが、ごちらかと云へば前後の脈絡が幽微であります。既に選擇集が前にも述べた様に、宗祖の信仰の告白書であるとするならば、何ゆへ宗祖は今すこし、一貫した組織ある叙述をされなかつたで有らうか。尙又その叙述の文體にしても、あ、した漢文のごつ、つ、したものよりは、彼の和語燈錄の様にすらくとしたやさしい和丈を以てせられたほうが、寧ろ自分の心持を表はすに應さわしくは無かつたであらうか、なごいふ疑問が次で起つてきます。

夫れについて調べてみなければならぬことは、兼實公の本集に對する希望であります。兼實公の希望は、勅傳、九卷傳等によれば「淨土の要文」といふに在つたやうで有ります。尤も十六門記にはたゞ「紙墨に載給て」と云つて、明かに「要文」とはなつてをりませんが、しかし宗祖も、その奥書に「仍今愁集念佛要文」と申されてゐる所からみれば、兼實公の註文が最初から「要文」といふに在つたことは、確かであると思ひます。

然し實を云へば、今集の撰述已前、我國には立派な一つの要文集がありました。所謂惠心の往生要集がそれで、兼實公も多分それは見てゐられたことゝ思ひます。けれどもこの往生要集は、一般に在家の所用としては、嘗に少しく廣博に失する嫌があるばかりではなく、又その内容の歸趣が、頗る明瞭を缺いてゐます。

漢語燈錄をみると、宗祖の往生要集に關する著作が三部あります。所謂往生要集大綱、同略料簡、同詮要が是で、いづれも皆な要集を縮小したもので有りますが、ことによると、この三部の著作も、或は復た上述の様な理由から、兼實公の依囑に由られたもので有るかも知れません。併し私は今こゝでさうした問題を論究しようといふのではありません。唯だ私は、兼實公が宗祖に對し、淨土の要文を懇請されたといふことについて、何等かそこに往生要集に關係が有りはしなかつたかといふことを、一言すれば足るのであります。

で兼實公の所謂「要文を」といふ懇願が、果して要集に關係が有つたかどうかは明かではありませんが、假りに今これを關係が有つたものとしていつてみれば、その所謂「要文を」といふは、内容に於ても形式に於ても、今少し要集よりは簡明に要を得たものといふ意味で、所謂要文を請はれた様であります。勿論その要文を、どこからどう選擇して、又どういふ様に配列するかは、一に係つて宗祖の胸中に在つたことで、選擇集十六章は、その選文(材料)に於ても配列(組織)に於ても、全く宗祖の

獨自なる意匠から來てゐます。そしてこの宗祖の獨自なる意匠こそは、聽て宗祖の胸中に在つた信仰其ものなので、所謂「活きた淨土宗」とは是であります。

選擇集の題號は、通常「選擇」の二字を彌陀につけて、彌陀の選擇し給ひたる、所謂選擇本願の念佛に關する要文集といふ風に解釋するのが、相傳の義となつてをりますが、一説では又た、選擇の二字を宗祖につけて、宗祖が彌陀の本願たる念佛の要文を選擇して集められたものと、いふ風に解釋する説もあります。

成るほど相傳の義の如く、彌陀本願の念佛は、單なる本願の念佛ではなくて、所謂選擇本願の念佛であり、殊にその選擇のいはれを、宗祖に勝易の二義を以て發揮をしてゐられるので有りますから今この題號を釋するに就ても、「選擇本願の念佛」といふ風に解するといふことは、誠に正當なことと思ひます。併し又た、唯だ單に「彌陀本願の念佛」と言つたところで、餘佛はさてをき、彌陀の本願ならば、自然にそこに選擇の意味が含まれてゐる譯であります。殊に選擇の二字は、獨りたゞ彌陀の本願にのみ局つて用ひられる詞では無いので有りますから、彌陀本願の念佛は、所謂選擇本願の念佛であることいふ迄もないが、茲に題號に選擇とあるは、宗祖が自分の考よりして本願念佛の要文を選擇されたのであるから、題して選擇本願念佛集といはれたのだと解するも、あながち道理のない説でもないと思はれます。